

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（11）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide11/

——スマホって自閉的なのかも——

「自閉症の世界」

多様性に満ちた内面の真実

（S・シルバーマン著 講談社ブルーバックス 1600円税別）

2017年5月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲット！そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。

今回は、査定の現場でもさまざまなパターンにお困りに違いない「自閉症スペクトラム」を理解するための本、

「自閉症の世界」。国内でも700万人の患者がおり認知症とほぼ同数とか。AD/HDやアスペルガーが日常語になりつつ

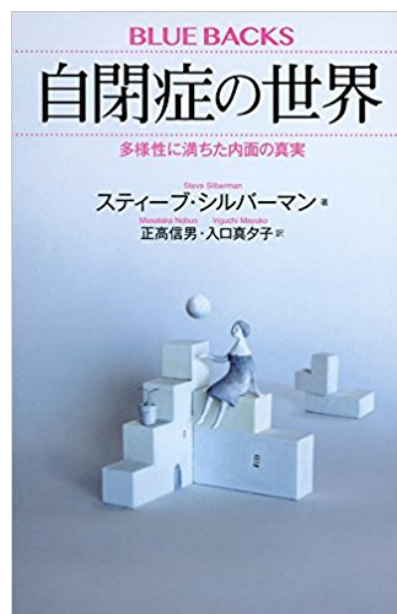
あり、ますます診断数は増えそうです。本書カバーからそのまま引用すると「20世紀半ばに研究が始まった自閉症。さまざまな誤解と偏見を経て、脳科学的に理解されるまでをたどりながら、知的障害ではなく、精神疾患でもない、感じ方や考え方が異なる人たち＝自閉症スペクトラムの真の姿に迫る」と、まあそのとおりで読み応え充分です。

新書で600ページにわたる自閉症研究の通史になっており、第二次大戦前後の研究黎明期から現在までに自閉症概念が形成されていく過程を読み進めば、かなり自閉症のエキスパートになることができます。こうした医学の通史的な読み物は第8回の「がん—4000年の歴史」もそうでしたが、翻訳ものに良書が多いです。著者は医師ではなく科学ジャーナリストですが、じっくりと書き続け、それでいて個々のエピソードが物語にもなっていて飽きさせずに最後まで引っぱります。「レインマン効果」のパートなどは感動もので、例のダスティン・ホフマンの映画のDVDを借りて見てしまいました。

日本人が書いた本も何冊か読みましたが、医療者が自閉症者や家族に向けて書いているものがほとんどでなかなか真の姿が見えてこないんです（参考図書参照）。

なるほどと思ったのは、現代のネット・スマホ社会を作り上げたのは、ジョブスやゲイツなど自閉症（気味？）の天才オタクたちであったという事実です。その意味では、ネット社会・スマホ社会は自閉症に親和性があり、電車でスマホに熱中している群衆をみると世の中もまた自閉症化しているのかも・・・と考えてしまいます。

自閉症は、教科書的なDSMによる診断学のほうから入っていくと混乱します。本書後半でも取り上げられていますがDSMの影響で自閉症の根本概念が変質していつているようにも感じられます。さらに日本では訳語の問題もあります。Pervasive Developmental Disorders



に広汎性発達障害という日本語診断名をあてているのですがpervasiveってニュアンスがいまひとつです。広汎性≠広範性だということを専門家以外がどれだけ理解できているのか・・・。

まずは本書で自閉症の世界を旅することをおすすめします。自閉症のスペクトラムの広さが見えてきて、わたし自身は査定方針的にはさらに不明瞭化してしまいましたが、それこそが自閉症のむずかしさなのだと感じました。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2017年12月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（12）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide12/

——冬休みに読みたい三冊——

「読まなくてもいい本」の読書案内

知の最前線を5日間で探検する

（橘 玲 著 筑摩書店 1600円税別 2015年11月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。

今年（2017年）最後のブックガイドになりました。気楽な本を選んでいるとはいえ、医学がからんでいるものばかり。でも保険って社会的側面も大きいですよ。そこで今回は年末スペシャル、医学から離れました。・・・ここ半年の間に読んだ医学系ではない本の中から、一見保険とは無関係に見えますが意外に仕事に役立ちそうという3冊を選んでみました。



まずは橘玲「「読まなくてもいい本」の読書案内」。これはおすすめです。複雑系・進化論・ゲーム理論・脳科学・功利主義の分野で読むべき入門書を示しつつ、トンデモ本を一刀両断。ネット社会以前の学問、とくにポストモダンとか精神分析とか・・・ほとんど陳腐化してしまいました。ネット社会以降の日本の文系学問（大学でやっている法学・経済学・文学・教育学 etc.）はすべからず古いパラダイムから脱出できず、文系大学の廃止は当然・・・まあ痛快ではあります。アンダーライティング部門で科学的な思考をしても、保険会社って、ま、古い文系パラダイムが主流だからな～というグチをいいがちですが、そんな人も溜飲がさがるという一冊。因みにドクター・ホンタナのブックガイドは、読まなくてもいい本は「まあまあ」とか「～には役立つ」程度の表現を使っています。読むべき本は絶賛していますので、ご参考に。

2冊目は中川毅「人類と気候の10万年史」。気候と保険・・・はかなり離れていそうですが・・・。成長トレンドにせよ下向トレンドにせよ、普段の日常は（保険業にせよ、人生にせよ）ゆっくりと変動するトレンドを前提にしていますよね。ところが、予測できない激変があってガラガラポンになり、またそこからトレンドになる。このガラガラポンをPhase change（相転移）と呼びます。特に、気候学では、温暖化・寒冷化のPhase changeのしくみがかなり詳しく明らかになっています。われわれのアンダーライティング環境もいつPhase changeに見舞われるかわかりません。トレンドを追うだけではなくPhase changeに備える、そんな視点の重要性を教えてくれる、これも絶賛の一冊です。

最後はちょっとタイトルは微妙ですが、片山杜秀「国の死に方」。この本が保険と関係あるとは思わずに読んでいたのですが、関東大震災の時の保険金不払問題（地震免責）が詳しく書かれていて驚きでした。このときのさまざまの出来事が保険金不払い問題とからんでい

たらしいです。地震による火災ではなく放火だという強弁などなど。結局政治主導で約款を超えた支払を強要されたらしいです・・・いやあ、勉強になりますよ。「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として（マルクス）」ですね。

年末年始は5連休以上の会社が多いのではないのでしょうか。この3冊、こたつでぜひ読んでみてください。それではみなさんよいお年を。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2017年12月）

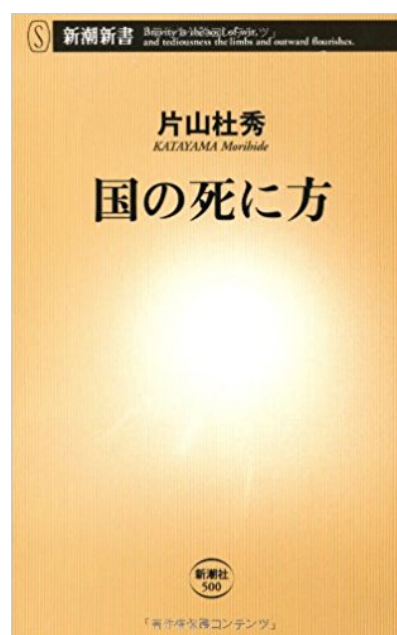
関連本・サイトなど

人類と気候の10万年史

（中川 毅著 講談社ブルーバックス 920円税別 2017年2月刊行）

国の死に方

（片山 杜秀著 新潮新書 720円税別 2012年12月刊行）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（13）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide13/

——科学の力で悪魔祓い！？——

8年越しの花嫁

キミの目が覚めたなら

（中原尚志・中原麻衣著 主婦の友社 1200円税別 2015年7月刊行）

新年明けましておめでとうございます。「気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう」、そんなコンセプトでブックガイド書いています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホントナ（ペンネーム）です。さて年頭ということで、2017-18年の冬休み映画「8年越しの花嫁」（佐藤健・土屋太鳳主演）の原作本を紹介します。（映画もまだやってます・。）

この映画・原作は、まあいわゆる「難病＋愛」というジャンルなんですが、もうひとつの側面があります。実はこの映画、「抗NMDA受容体脳炎」という難病の存在を啓蒙するという意義があるんです。皆さん知ってましたか？、この病名。

2000年以降になって解明された疾患らしく、「抗NMDA受容体脳炎」という病名は耳新しいんですが、不肖ホントナはこの映画を取り上げていたテレビ番組で初めて知りました、勉強不足・・・。驚いたことには、私の学生時代に大ヒットした映画「エクソシスト」

（1973）のあのベッドから跳ね上がったたり、首が180度以上回る悪魔憑きの女の子、あの子の症状はこの病気で説明つくらしいです。

「エクソシスト」から40年たって、あれが悪魔憑きではなく自己抗体による疾患だったということが解明されたわけです。分子生物学や抗体医学の偉大な成果ですね。驚きです。適切な治療がなされれば治るということですが、臨床医でもこの病名知らない人は多いらしく不適切な治療で症状がすすんで亡くなったり重篤な後遺症が残る場合もあるらしいです。そこで、まず医師にこそこういう疾患の存在を知ってほしい！ということです。

しかし、この病気と同じように、これまで精神の疾患と思われていた一例えば統合失調症—も、研究が進めばこうして疾病のメカニズムが解明されて治る病気になってしまうのかもれません。すごい時代です。

紹介したのは実在の患者とその夫（婚約者）が書いた闘病記に近いものですが、同じ書名で映画のノベライズ版、コミックなど種類豊富です。また、この病気のことをもっと知りたいという方には、同じ病気を克服したアメリカのジャーナリストが体験記として書いた「脳に棲む魔物」も読み応えあります。



なにはともあれ「抗NMDA受容体脳炎」、検索して勉強しましょう！（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年1月）

関連本・サイトなど

脳に棲む魔物

（スザンナ・キャハラン著 KADOKAWA/角川マガジンス
1800円税別 2014年5月刊行）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（14）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide14/

——「がん」は「幹細胞」の病気——

「がん幹細胞の謎にせまる」

新時代の先端がん治療へ

（山崎裕人著 ちくま新書 880円税別 2015年8月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「がん幹細胞」。

卵子と精子が合体して受精卵に。受精卵は次々に細胞分裂を繰り返します。この時、単に分裂するのではなく、分裂回数に合わせて次第に、手になるべき部分は手に、心臓になるべき部分は心臓に・・・という具合に最終目的の臓器になるために段々と分化していくわけですね。その段々と分化していく途中で、それまで持っていた何にでもなれるという多能性も次第に失われていきます。（このあたり我々の人生とも似てますね・・・）

血液で言えば、赤血球にも白血球にも血小板にもなれたものが、白血球方向に分裂・分化していくともう赤血球にはもどれません。その白血球方向にすすんだものもさらに好中球やリンパ球へと分裂・分化していきます。「幹細胞」とはまだ最終目的まで到達しておらず、分化する能力がいくばくかでも残っている細胞と考えればいいでしょう。

「がん幹細胞」理論とは、この「幹細胞」に異常（＝変異）がおこって「がん幹細胞」となり、そこから先、まちがった分化をした「がん細胞」を作りつづけるというものです。つまり、この「がん幹細胞」の存在こそががん発生の本質というわけです。肝臓がんを例にとると、成熟肝細胞ががん化するのではなく、成熟肝細胞を産み出すべく肝臓に潜んでいる肝細胞の「幹細胞」ががん化するのです。ですから、抗がん剤で「がん細胞」をやっつけても「がん幹細胞」が残っているかぎり、この「がん幹細胞」はまたちがう変異をもつ「がん細胞」を作るようになり、そうするとそれまで効いていた抗がん剤も効かなくなります。

幹細胞の研究は、「受精卵がいかにして分化していくのか」という発生学の側からせまるアプローチが昔からあって、そこからはクローン羊ドリーなどを經由してiPS細胞が作られました。一方、「がんはなぜできる」という腫瘍学の側から見れば、今回紹介するように「幹細胞」レベルでおこる遺伝子変異などの細胞異常こそが、がんのもと＝「がん幹細胞」という考え方が最先端です。そして、現在はこの2つの最先端はかなり近接してきています。ですからiPS細胞を治療に応用しようとする場合、iPS細胞のがん化という問題が出てくるのは当然といえば当然なのです。



2015年発行の本書「がん幹細胞の謎にせまる」は現時点でも「がん幹細胞」を正面切って解説してくれる唯一の一般書です。本書を読めば「がんとは幹細胞の病気」であるとすっきりと理解できるでしょう。そして、「がん細胞」だけを標的とするだけではなく、「がん幹細胞」をも標的とした治療こそが「新時代の先端がん治療」であり、それが現在の研究の最前線になっていることも納得です。

がん研究の歴史は以前紹介した「がん—4000年の歴史」でもかなり詳しく書かれていましたが、そのさらに先にある「がん幹細胞」のことを知るには本書が第一選択でしょう。ちくま新書もあなどれません。

しかし、こうやってがんの発生についての研究がすすみ、がんさえもが慢性病のひとつとして治療できるようになったら人はどんな病気で死ねばいいのか・・・と考えてしまいますね。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年1月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（15）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide15/

——極私的、思い出のヒーロー——

「移植医たち」

（谷村志穂著 新潮社 1900円税別 2017年8月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています、査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回は、ほとんど個人的な思い出話で恐縮ですが、「移植医たち」です。

平成も残り1年ちょっとということになりました。家内からは「昭和の夫」と揶揄されることの多い私ですが計算してみると昭和を31年間、平成を31年間生きることになり、きっかり50%の昭和の夫です。昭和といえばその終わり頃、私が医学部を卒業した時分は、臓器移植ブームの時代でした。「外科医になるなら移植医を目指すべし！」そんな時代です。去年の夏、その頃をノスタルジックに思い出すことができる谷村志穂さんの小説「移植医たち」が刊行されました。



「移植医たち」は日本の肝臓移植医療のスタート地点（と言っても30年くらい前）からの物語。大学名や個人名は架空のものになっていますが、小説の主人公である「佐竹山教授」こそは、私が医師になったとき最初の指導医だった「藤堂省（とうどうさとる）先生」がモデルです。藤堂先生の詳しい経歴はぜひWikipediaで読んでみてください。藤堂先生が日本に見切り（？）をつけて肝移植のメッカ、ピッツバーグのスターツル教授のところに行ったのが1985年、38歳の頃です。私はたぶん先生の指導を受けた最後の研修医です。その後、先生はアメリカでも超人的ながんばりで「神の手」と呼ばれるまでになります。そのがんばりのすごさはぜひ「移植医たち」を読んでください。私はいろいろフラッシュバックして感涙してしまいました。

藤堂先生、今70歳ですか。その生きざまは、「大学医局を飛び出してアメリカで教授に」という絵に描いたような成功、それでもアメリカでの地位をなげうって日本の移植医療のために帰国、ところが、開拓者魂を発揮できると思った北大では日本的な嫉妬と陰謀とマスコミに翻弄され、歳月はながれ移植医としてリタイアの年齢へ。たとえ、どんなにパワフルであったとしても一人一人の人生は、時代の流れの中でこのように消費され埋没していくものなのではないでしょうか。

本書23ページから・・・「佐竹山（≡藤堂）は、新人を捕まえるとペアを組み、深夜までかかって治験のデータ収集を続けた。夜が遅くとも、翌朝6時半には出勤する。・・・ペアになった新人は次々体調を崩し、中には吐血や下血の症状を訴える者まで現れ、佐竹山（≡藤堂）は、大学ではもはや変人扱いだった。」—ここに出てくる「新人」はまさに35年前の私のことです（吐血や下血はフィクションです）。

脳死移植法の成立(1997)・改正(2010)などのたびにマスコミが騒ぎ、センセーショナルだった移植医療。30年経った今、脳死移植で年間300例ほど行われています（腎104・肝57・心44・肺45・膵35；2015年）。意外に多いという気がします。ある程度確立した医療になったということでしょうし、移植医療のニーズは日本ではこのくらいだったということなのかもしれません。日本保険医学会でも1994年には総会のシンポジウムテーマとして取り上げるくらい話題性がありましたが・・・「ドラマチックでめったにない出来事は大局的には生命保険には影響しない」の好事例になりました。

移植・・・その派手なパフォーマンスに憧れたあの頃、そこに飛び込んだ人生（と飛び込めなかった私）。「移植医たち」は、私の知らない藤堂先生の35年間を想像させ、自分が選ばなかった人生を疑似体験できる小説でした。藤堂先生、もう会うこともないかもしれませんが・・・お元気で。 You are my hero, forever・・・

（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年2月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（16）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide16/

——アンダーライティングとAI ①——

「人工知能の核心」

（羽生善治・NHKスペシャル取材班著 NHK出版新書 780円
税別 2017年3月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは人工知能AIです。

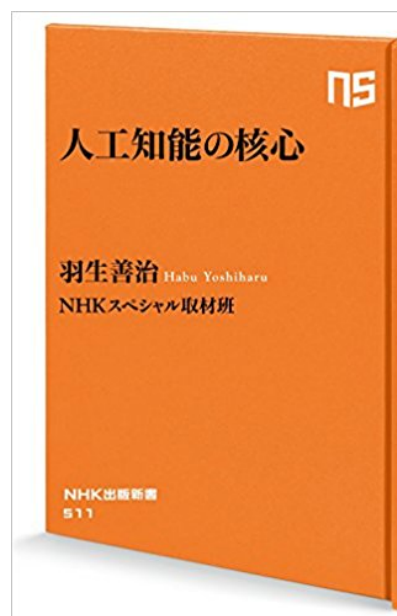
AIをとりあげた本は巷にあふれています。AIの研究者・推進者が書いたものから、「あなたの仕事はAIに取って代わられます」と不安をあおるものまでサマザマ。「アンダーライター」もAIにとって代わられる職種として上位に取り上げられることが多いので不安に思っている人も多いのでは・・・ところが、書籍をいくつか読んでみてもAIについては本当に多種多様な意見が交錯していてよくわからない状態です。引き続きウォッチして面白い本を「アンダーライティングとAI」シリーズとして定期的に紹介して行きたいと思っています。今回はシリーズ1回目でイントロだと思ってください。

こういう最先端すぎてはっきり見えてこないテーマのときにはNHKオンデマンドを利用してNHKスペシャルの関連番組を見るようにしています。ぴったりなのが、AIとの闘いの渦中にある「プロ棋士」はどう考えているのかという番組で「天使か悪魔か 羽生善治 人工知能を探る」（2016年5月放送）とその続編「人工知能 天使か悪魔か 2017」（2017年6月放送）です。なかなか考えさせられました。しかし、テレビ番組は視聴率をとるためかややセンセーショナルな表現もあり、じっくり考えることができません。

そこで今回はこの2つの番組の中間の時期にNHK出版から刊行された「人工知能の核心」という本を紹介します。番組を見逃した方にも最適な一冊。イギリス・アメリカと羽生善治が取材や対談を通して感じたこと、学んだことがちりばめられており興味深いです。「フレーム問題」などAIの弱点も見えてきます。

AIは保険のアンダーライティングができるのでしょうか？数値で表される血圧や体格などすでに機械化されてる部分も多いのですが、人体というアナログなものを扱う医療が刻々と変化することを考えると、ルールが固定化している将棋や囲碁みたいなことにはなるとも思えません・・・AIが告知書や診断書の行間を読める日がくるのでしょうか。

そういえば、本書中でもAIには接待将棋（例えば、相手に気づかれない範囲で手を抜いていい勝負している気分させてくれるようなこと）はできないとあり、このあたりの忖度は人間じゃなければ・・・と感じました。医療そのものの不確実性につながる話かもしれませ



ん。

ここ数年で、将棋も囲碁もあっという間にAIに飲み込まれたかに見えました。ところが、将棋界・囲碁界はAIはAIとして人間同士の勝負はまた別のものととらえ、AIの指す手を人間同士の勝負にどう応用するか、という方向に進んでいるように思えます。われわれアンダーライティングを行う者も過小告知や美化告知という泥臭い世界で人間の優位を見出すのかな……。 (査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年2月)

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（17）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide17/

—— 60ページの必読書 ——

B型肝炎 なぜここまで拡がったのか

（奥泉 尚洋・久野 華代著 岩波ブックレット520円税別
2015年9月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回のテーマは「B型肝炎」。

査定を始めた頃は危険選択の上ではB型肝炎よりC型肝炎のほうがずっと重要だと感じていましたが20年たって逆転してきました。最近になってBのキャリアの告知に遭遇することのほうが増えてきたのでなぜかなと思っていました。その事情をまずお話しします。

BもCも血液を介して感染するのですが、Cは感染力そのものは弱く血液が直接血管内にはいるような濃厚接触が必要なのです。そのため母子感染もほとんどなく、輸血や注射器具がクリーンに使われるようになってからは新規感染がなくなりました。過去のC感染者が高齢化（感染ピークは太平洋戦争前生まれの集団）していくにしたがいCは過去の病気になっていったのです。いっぽう、Bは感染力がCより強く、戦後の乳幼児ー学童の大量予防接種期の注射針・注射器による蔓延があり、さらに母子感染・性行為による感染がありえるため、今なお新規感染者が発生する可能性があります（1986年の妊婦スクリーニング後、母子感染はなくなりました）。

Bのキャリアの多くは戦後の予防接種による感染者と言われており現在50代～60代です。そして、ここ10年ほどは、このキャリアが出産し出生時に母子感染した子供世代キャリアが結婚・妊娠・出産期をむかえています。出産時の母子感染の予防策がとられていなかった1986年以前にキャリアの母親から生まれていれば母子感染してキャリアである可能性があります。また性的パートナーがそうしたキャリアである場合も感染している可能性があります。このようにBについては1986年以前のうまれかどうか、つまり2018年の時点で34歳より上か下かで明確な境があるのです。

B型肝炎訴訟が2011年に和解となり、国からの賠償がでることになりました。そのせいで弁護士・司法書士などがそれを商売のネタとしてネットや電車広告で喧伝していることも増えている原因といえるでしょう（和解そのものは医学的には不明瞭な部分が多く菅直人総理の政治的パフォーマンスの要素が多分にありましたが・・・）。

今回紹介する「B型肝炎 なぜここまで拡がったのか」はたった60ページ、520円の小冊子にすぎませんが、ここまで書いたすべてが腑に落ちるかたちでわかります。30分で読めて、必要なことがほとんどわかる驚きの良書です。参考に岩波新書の「肝臓病 治る時代の



基礎知識」を読んできましたが、専門医が総論的に書いたものはやはり退屈でした。本書はさらに、戦後の予防接種の歴史、B型肝炎訴訟の歴史、厚労省の予防接種（に限りませんが）行政のいいかげんさ、までもがすっきり理解できます。おすすめです。

教訓として・・・「自身あるいはパートナーが2018年時点で34歳以上であれば、一度はB型肝炎の検査を受けるべき・受けてもらうべき」ということは言えるでしょうね。新婚の30代カップルで夫が急性B型肝炎で入院、調べてみたらキャリアであった妻からの感染、さらに妻の両親もキャリアだった・・・ということもありえるわけですから（このケースはNHKの医療番組Dr.Gで紹介されていました）。

（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年3月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（18）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide18/

——前代未聞の恥ずかしい臨床研究——

赤い罫

ディオバン臨床研究不正事件

（桑島巖著 日本医事新報社 2000円税別 2016年9月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。今回取り上げるのは「ディオバン事件」、つまり研究不正。

ディオバン事件とは・・・ノバルティス・ファーマが発売した血圧の薬（ディオバン）をのむと、血圧が下がるだけでなく他の降圧剤にくらべて、心臓病や腎臓病などの合併症も起こりにくくなるという結果の論文を京都府立医大・慈恵医大・滋賀医大・千葉大・名大から国内外のジャーナルに発表し、それをノバ社が宣伝材料に使うことでディオバンは爆発的に売れました。ところが、それらの大学から出された論文のかなりの部分がノバ社のからんだインチキなしろものであることが判明。さらには、それらの研究そのものにノバ社の関係者も携わっていたこともばれて、論文は撤回され、ある教授はやめさせられ、ノバ社と社員が厚労省から刑事告発される・・・という事件です。この10年くらいの間の事件。

嘘で作り上げられたメリットを信じてか、信じたふりをしてか、多くの医師によって薬価の高いディオバンが大量に処方された結果として、国民（健康保険）と患者（自己負担部分）に総額年間200億円の損害が生じたとする試算もあります。そんなディオバンは今も売られています。

本書「赤い罫」は、まさにその論文のインチキに気づきそれをあばいた桑島先生本人が書いた本。いやあ、インチキのばれる発端、告発への居直り、右往左往する学会・・・推理小説みたいで面白いです・・・しかし、なんだかだんだん悲しい感じにもなります。わかってみればあまりにもチープなインチキのオンパレードなんですよ。

ワセダクロニクルの回（2017年11月）でも取り上げましたが、薬の世界は「なんでもありなのか」と考えてしまいどっと疲れてしまいます。巨大資本のメガファーマに屈して、お先棒を担いでしまう医師の面々にも。STAP細胞の事件でもそうでしたが、ネット社会は名声も広めますがインチキを暴くことにもパワーを発揮するということですね。

本書は刑事裁判の判決前に出版されましたが、その後の東京地裁では「論文のインチキは認めたものの誇大広告にはあたらない」という判決（2017年3月）でした。これまた処方薬のマーケティング手法がわかってないなあ、という印象です。控訴中ですが、今のところ売ったもん勝ちの様相を呈しています。



どんな医療が行われるか・どんな薬が処方されるかは民間保険にも大きく関わってくるところです。これまで国民皆保険の中で医療の質は医療者の性善説により支えられてきたとも言えますが、時代は変わってきたようですね。本書を読めば、医者が、あるいは医者だからこそ（？）、名誉欲や金銭欲のためにそんなことまでする？！・・・ということを痛いほど学べます。医者の行動原理も多様化しています、拝金主義者が増えていることも事実。そんなことを念頭において診断書や治療内容明細から読み解かなければならない・・・そんな時代です。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年3月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（19）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide19/

——新年度、一般書で医学の教科書選ぶなら——

まんが 人体の不思議

(茨木保著 ちくま新書 945円税別 2017年5月刊行)

4月、新年度です。文系の大学を出て保険会社に入ったらアンダーライティング部門に配属されて・・・医学のことがチンプンカンプン！そんなあなたに、サクッと読めて医学の全体像がつかめる本を探せ！ というテーマで、ここ一年くらいの間に出版されたもののなかからブックガイドしてみます。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。

まずイチオシは「まんが 人体の不思議」。なんといってもマンガです。意外に内容はしっかりしています。もともと人体のことですから言葉よりもイラストで学ぶほうがいいに決まっています。著者は猫山先生でおなじみ（？）

の茨木保先生、医師でマンガ家、他にもたくさんの医学マンガを描かれています（公式サイト参照）。例によって微妙なうんちくを交えながら、医師が読んでも十分楽しめます。それに定価1000円以下！まずはこれを読みましょう。（カバー・オン・カバーで地味なカバー版もありますが中身は同じ）



2冊目は医事新報の連載つながりで、阪大病理の仲野徹教授の「こわいもの知らずの病理学講義」。マンガではありません。大阪のおっちゃん、おばちゃんにわかるように書いたということですが・・・若干中途半端ですね。イラストもほとんどないので、おっちゃん、おばちゃんには向いてないと思います。一方で、真剣に読み込むにはレベルが低いような。まあ、立ち読みしてみてもあの語り口が合うという人はいいかもしれませんね。

3番目は「カラー図解 新しい人体の教科書 (ブルーバックス)」これは上下巻の辞書の厚さの新書ですが、まさに教科書以上の出来栄え。というか正常の人体の構造と機能ならこの上下巻で十分でしょう。イラストもすごくいいです。上下で4000円するので躊躇しますが、Kindle用（とはいってもiPadのような大きめスクリーンが必要）は上下合本版がやや安価で買えるようです。iPad持っている人にはそちらもおすすめ。PC上のKindleで使って講義用の資料作ったりするのも使えそうです。

フレッシュパーソンの皆さん、意外に奥が深いアンダーライティングの世界を楽しんでいきましょう！（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年4月）

関連本・サイトなど

茨木保先生 公式サイト

こわいもの知らずの 病理学講義

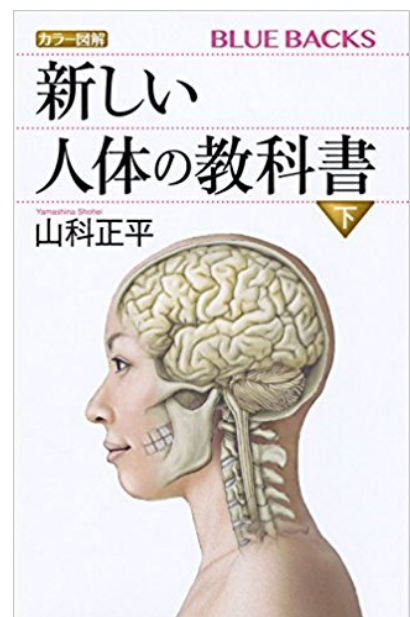
(仲野徹著 晶文社 1850円税別 2017年9月刊行)

カラー図解 新しい人体の教科書 (山科正平著 講談社ブルーバックス)

(山科正平著 講談社ブルーバックス上1680円税別 2017年4月刊行)

カラー図解 新しい人体の教科書 (山科正平著 講談社ブルーバックス)

(山科正平著 講談社ブルーバックス下2000円税別 2017年10月刊行)



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（20）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide20/

——アンダーライティングとAI ②——

AI vs 教科書の読めない子どもたち

（新井紀子著 東洋経済新報社 1500円税別 2018年2月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴21年目に入りました自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。2月に人工知能（AI）を取り上げましたが、その直後に発売されたこの「AI vs 教科書の読めない子どもたち」（新井紀子）が大ヒット！著者の新井先生をテレビで見ることも増えています。そこであわててブックガイドすることに。新井先生は国立情報科学研究所教授。「ロボットは東大に入れるか」という前著も刺激的でしたが今回もAIと人間の関係をめぐってのあれこれ。なるほどと納得させられることばかりです。

「AIは神に代わって人類にユートピアをもたらすことはないし、その能力が人智を超えて人類を滅ぼしたりすることはありません、（中略）AIやAIを搭載したロボットが人間の仕事をすべて肩代わりするという未来はやって来ません。それは、数学者なら誰にでもわかるはずのことです。AIはコンピューターであり、コンピューターは計算機であり、計算機は計算しかできない。（中略）AIがコンピューター上で実現されるソフトウェアである限り、人間の知的活動のすべてが数式で表現できなければ、AIが人間に取って代わることはありません。（中略）今の数学にはその能力はないのです。コンピューターの速さや、アルゴリズムの改善の問題ではなく、大本の数学の限界なのです。」と、「はじめに」でAIの万能性をばっさり。

しかし、新井先生は続けて「シンギュラリティは来ないし、AIが人間の仕事をすべて奪ってしまうような未来は来ませんが、人間の仕事の多くがAIに代替される社会はすぐそこに迫っています」と。そしてそれを20世紀の大恐慌との類似性で説明します。

20世紀初めベルトコンベアの導入で工場のオートメーション化される一方、事務作業が増えホワイトカラーと呼ばれる新しい労働階級が生まれました。しかし、これは一度におこったわけではなく、ホワイトカラーが大量に生まれる前に、多くの工場労働者が職を失い社会に失業者があふれ世界大恐慌の遠因となりました。

現在、職場で進行中なのは、実のところはコンピューターとネットを利用することで手作業の事務仕事が急激にオートメーション化されるプロセスにすぎないのです。ディープ・ラーニングが有効な将棋・囲碁の世界のAIとはあまり関係ないんです。オートメーション化されてしまう事務作業の労働者が失職し、このままでは大恐慌と同じように失業者があふれる可能性は高いということです。コンピューターと人間の対立ではなく、新しい仕事に就けるか就けないかという人間同士の争いになります。



一方で、受験偏重の日本の教育の中、現在の中高生は、採点しやすい英語の単語や世界史の年表、数学の計算などの表層的な知識は豊富ですが、中学校の歴史や理科の教科書程度の文章を正確に理解できない（例は本書中に多数しめされています）、つまり文脈の理解力がかなり低下しています。今の若い人が得意な、英単語・年表・計算といったことはまさにコンピューターにとっても得意分野。つまり現代の労働力はコンピューターにとって替わられやすい構造になっているんです。

多くの仕事がコンピューターに代替された社会の未来予想図は「労働市場では深刻な人手不足に陥っているのに、巷間には失業者や最低賃金の仕事を掛け持ちする人々が溢れている」・・・となり・・・そうならないために、今起ころうとしていることを社会に伝えて、教育の方向を正したい、そういう熱意がひしひしと伝わります。「あっ、AIってそういうことなのね」と納得の一冊です。新井先生の著作は今後も要フォロー。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2018年4月）